DOI:10.20776/S18814859-18-1-P100

【論説】

趣味縁の「光」と「影」
――「好き」に基づくつながりの両義性

千葉大学大学院人文公共学府人文公共学専攻博士後期課程
髙木　悠希

1．はじめに

趣味縁は、趣味の共通性や趣味への共感を契機に結ばれる縁であり、個人が自分の好みによって取り結ぶネットワークである。後述するように、第二次世界大戦後の日本社会は「第一の個人化」を経た後、1990年代後半の平成不況期以降に「第二の個人化」を迎えたという（渡部2016）。それは、血縁・地縁・社縁といった旧来型共同体・中間集団の衰退に伴い、個々人が自ら人間関係を築いていかなければならなくなったことを意味したが、この現代社会の状況こそが、趣味縁の新しい紐帯・集団としての重要性を高めたとも言える。今ではインターネットやSNSの発達も手伝って、同じ趣味をもつ人と知り合いつながる行為はより容易に、より一般的になったと言えよう。

今日ある趣味縁研究は、管見の限り、趣味縁に何らかの肯定的な効果を見出したり、期待したりする内容のものが大方であると指摘できる。その一方で、それが“好み”だという理由だけで他者を差別し強い排他性を示す可能性がある（藤田1991）など、趣味縁の否定的な効果に言及するものもないわけではない。ただし、そうした負の側面に注目した上で、これを先の正の側面と関連付けて論じる研究はまだ乏しいのが現状である。

そこで本稿は、趣味縁に期待される正の効果・「光」を精査するとともに、その負の効果・「影」を考察することで、趣味縁の両義性を検討し、現代日本社会における「「好き」を契機につながること」の将来性を展望することを目的とする。そのためにまず、趣味縁および趣味縁研究の背景を踏まえ、その重要性と

本稿の論旨を確認した後で、先行研究から趣味縁の「光」と「影」を析出し、且つこれらを並置して考察することで、両者の関係性について指摘を行いたい。

なお周知のように、2019年末以降、新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、世界は同時に共通の脅威に直面するという未曾有の状況を経験している。そうした中、人と直接会えない、イベントが開催できないといった困難によって、文化・芸術や趣味によるつながりは、人間らしい生活を送る上でかえって必要不可欠なものであるということが浮き彫りになったと言ってよかろう。今、改めて趣味縁の「光」と「影」を問うことは、アフターコロナの世界に対して少なからぬ示唆を残すことになると考えている。

２．研究の背景

2.1　社会的背景

まず本稿における「趣味」の意味について、個人がこだわりを持って取り組んでいる活動を想定した、hobbyとしての趣味の意であることを表示しておく。その上で、本論に入る前に、まず共通の趣味を契機としたつながり――趣味縁がなぜいま重要だと言えるのかという点について、社会的背景から確認・考察していきたい。ここでの要点は主に①日本社会における近代化・個人化の進展と、②趣味の重要性の高まりの２点である。

①日本社会における近代化・個人化の進展

第二次世界大戦後、高度成長期に伴って、血縁・地縁といった第一次集団が中心であった伝統社会は弱体化し、そこからの脱埋め込みとともに、日本的雇用システムと近代家族モデルからなる近代社会構造への再埋め込みが起きた（日本における第一の個人化）（渡部2016）。しかし、1990年代後半の平成不況期に入ると、長期安定雇用の動揺や非正規雇用の拡大、正規と非正規との雇用格差拡大等によって、会社という第二次集団さえも弱体化し、人々は近代社会構造からも脱埋め込みされることとなる。それは、これまで経済的基盤やアイデンティティの基盤となっていた、企業や家族からなる組織・構造が機能しなくなったこと、その代わりに個々人が自ら社会関係を構築しなければならなくなっ

たことを意味した（日本における第二の個人化）（同上）。これにより、「人々は恒常的なアイデンティティ不安および経済的不安という二種の不安に苛まれることになり、またそれらの諸問題に、企業や家族としてではなく、個人として自己の責任において対応しなければならないという状況に晒されるようになった」（渡部 2016：88）。

②趣味の重要性の高まり

そして、こうした個人のアイデンティティが伝統的共同体や職業的地位などによっては保証されなくなった社会では、文化に関わる個人的価値を創出することが重要となった（片岡 2019）。その重要性に日本社会全体として気が付き始めたのは 1990 年代後半以降ではないかと片岡は推測している。「かつてのように、いい学校を出て、いい会社に入り「エライ」人になることよりも、むしろ音楽や芸術の趣味、ファッションセンス、文化的能力やエートス、趣味による友人ネットワークなどが人々の自己を表現する基準となり、地域や会社を超えて、趣味が人々を結び付けていく時代が到来したのである」（片岡 2019：30）。

さて、第二の個人化を経た日本の人間関係に対しては、近代の強固な社会的枠組みが解体したことを「自由」と捉え、趣味コミュニティをはじめ、特に若者層において新たなネットワークとしての連帯のかたちが生まれているとする、ポジティブな見方がある（渡部 2016）。

しかし一方で、ネガティブな見方も提示されている。そのひとつは、人間関係の維持・構築の要件に着目したもの（石田 2011）である。これによれば、血縁・地縁・会社縁といった中間集団が堅固だった時代では、社会によってあらかじめ形成されている行動様式を遵守すれば人間関係が維持・形成できた。それが、近代化・個人化を経たことで相互のコミットメント、つまり当事者たちの積極的関与によって成り立つものへと変化していく。こうした関係性は、自らの好みに合わせて関係を構築および消去できるが、そのことが同時に、相手の満足や相互の承認を常に気にする不安定さをも招いた。このことから、関係が解消されるかもしれないという強い不安と、それによって参加者の心理に過剰に神経質にならざるを得ない状態が発生することが問題点として指摘されて

いる。

ただし、石田の指摘で最も重要なのは、今後の日本社会で新たな連帯が構築される場合、関係の自由化と結びついて新たな排除（社会的排除）を生み出しかねないと予想している点である。これについては渡部（2016）を参照することで、より鮮明に理解できるのではないか。すなわち、個人的ネットワークを中心とする社会では、高い対人能力を持つ者は〈つながり〉に接続できる一方で、そうでない者は孤立せざるを得ないという格差状況――「〈つながり〉への接続可能性の格差化」が発生する危険性が高いのである（渡部 2016：93）。

このように、戦後日本社会では近代化・個人化の進展によって、人々の取り結ぶ関係が中間集団に保証されたものから個人が獲得・構築・維持しなければならないものに変化し、これに伴い、文化に関わる個人的価値を創出することで自己を表現しネットワークを築く重要性が高まった。しかし、こうした選択自由な関係性は相手の心理に依拠した不安定さをもたらしただけでなく、〈つながり〉への接続可能性の格差といった、新たな社会的排除を招く危険を孕んでいるのである。

2.2　趣味縁研究の意義

趣味縁は、趣味の共通性や共感可能性を契機に結ばれる縁であり、個人が自分の好みによって取り結ぶ新しいネットワーク、新しい連帯のかたちである。本節ではその展望を考えるために、下位文化理論に基づいて日本における同類結合と都市の影響を分析した赤枝（2011）を参照しよう。そこで取り上げられるのは、都市ほどネットワークの選択性が高まるために、かえって人々の間に同類結合、つまり自分と意見や価値観を共有する、似た者同士で結びつく傾向が起こりやすくなり、これが多様な下位文化の生起に繋がるというフィッシャーの理論（Fischer1982＝2002 など）である。赤枝はこれを日本に適用して、日本での同類結合に対する都市効果の影響を分析した。その結果、日本では趣味・娯楽の側面で都市効果が確認でき、趣味的な同類性への選好が相対的に高いことが明らかとなった。

ここでの「都市（効果）」の意味・特徴は、日常的に接触可能な人口が多く、ネットワークの選択性が高いことに依るが、転じて現代社会における我々の状況は、インターネット技術の発達・普及に伴い、誰もがどこにいても大量の情報と多様な選択肢の中に身を置いている状態――いわば、常時都市効果に晒されている状態と言っても過言ではなかろう。すると、日本社会における趣味的なつながりは、今後より一層拡大し一般化することが予想出来るのではないか。

さらに趣味縁は、決して人々の実生活上の問題から離れた余剰的・余暇的な人間関係に留まってはいない。今般のコロナ禍では、奇しくもその一端を垣間見ることが出来た。韓国の男性アイドルグループ・BTS のファン（呼称：アーミー）のある女性は、コロナ禍で困窮しているアーミーに学用品や生活用品を届けることを発案し、これをツイッターで発表したところ、計 50 人分の支援物資がすぐに集まったという（守 2021）。このように、趣味を通じて築かれた縁はもはや、人々のリアルな「生きていくこと」の中に立ち現れているのである。

そして趣味縁の拡大は、共通の「好き」によってつながる新たな連帯の発展可能性を示しているだけではない。前節の議論と併せれば、趣味縁への接続や関係解消の不安をめぐって弱者を生み出すという、これまでにない社会的排除の機能が広がる危険性をも暗示しているのである。そもそも、趣味は決して永続的なものではなく、「好き」という感情もまた楽観的なものとは言い切れない。本稿の関心は、そうした趣味縁の負の側面にも向けられている。

このような関心の意義は、単に趣味縁そのものの実態を提示するだけにとどまらない。「好き」を契機にした縁は、今や趣味縁に限ったものではなくなっているからである。例えば、「関係人口」の一種として、県外出身者も含めた特定地域の「ファン」同士がつながるコミュニティといった、従来の意味とは異なる県人会が生まれていること（中村 2021）が挙げられよう[1]。つまり、旧来共同体をも組み替えるようにして「共通の価値観でつながる」縁が広く構築されてきており、血縁・地縁・社縁といった枠組みにも、抜本的な捉え直しが迫られているのである。

「好き」の共有と共感を基軸にした付き合い方の広がりは、ゆくゆくは社会全体の価値観に大きな影響を及ぼすものと考えられる。その意味で趣味縁研究は、現代社会に生じる社会関係全般を論じる上での新たな視角を提供する意義をも持つのである。

2.3　趣味縁研究の現状

では「趣味縁」という用語はいつから登場し、どのような意味で用いられてきたのか。趣味やつながりを扱った研究には、分野や年代を越えて様々なものがあるが、ここではあくまでも「趣味縁」という用語に着目して、先行研究を簡単に概観しよう。

趣味縁という用語そのものは、先行研究では井上（1987）が初出とされているが（加藤 2017）、これより前の 1979 年に発表された大内（1979）にも使用が認められる。大内は、日本が段々と豊かになる中で、先進諸国特有の福祉国家としての課題や、高齢化社会化といった難題に直面していると指摘する。そして、こうした未来課題への対策として、着実な成長を遂げている大衆文化の力に期待を寄せた。戦後の日本社会では、産業化・都市化の進展によって大家族制やコミュニティが崩壊するとともに、人々にとって所得の向上こそが福祉そのものであったため、社縁が優位であった。それがやがて「所得が生活を豊かにするうえの唯一の手段ではなくな」ると、スポーツや娯楽を含めた「「生活の質」の向上が新しい福祉の目標として重要性を増してい」くこととなったという（大内 1979：19）。そこで大内は、福祉社会への準備にあたって、日本社

[1] いわゆる県人会は、懐古的で階層的かつ組織的な地縁コミュニティであるが、これに対して近年では、20 代～30 代の若い県出身者が「地域が好き」「地域を応援したい」という共通の価値観でもってネットワークを形成しイベント等を開催する、「新しい県人会」が登場している（国土交通省 2021；中村 2021）。また、地域に何らかの興味や関わりを持つ人々を「関係人口」と呼び注目する動きもある（同上）。この関係人口には、その地域の出身者や住民、土地にゆかりのある人などが SNS を通じてつながる「ネオ県人会」のほか、出身者ではないが何らかのきっかけで地域のファンとなった者同士も参加出来る、SNS 上のファンコミュニティが数えられるという（有馬 2021；中村 2021）。

会の特徴を生かした「四つの縁」のミクスチュアを踏まえた視点が必要だと主張した。その4つとは、「血縁」「地縁」「社縁」「友縁」であり、このうち「友縁」は「趣味やサークル活動、スポーツなどを通じて生まれる人間関係を」意味するという（同上）。大内はこれを、「「趣味縁」あるいは「文化縁」と呼んでもよいかもしれない」と言い換えているのである（同）。友縁（趣味縁）は、血縁・地縁・社縁と比べて「利害の絡みの少ないあいだがらである」とされ、「人々が「家族」「地域」や「会社」で結びつくだけでなく、「文化」で結びついている社会、それが新しい社会のひとつのあり方ではないだろうか」との提起がなされた（同）。もっとも、大内の趣味観には現代の感覚とは若干異なる部分はあるが[2]、重要なのは、この時点で趣味縁が、血縁、地縁、社縁と並んで、且つこれらとは異なる性格をもつつながりとして捉えられていた点である。

その8年後、「趣味縁」は、日本人の人間関係を分析する研究の中で再び論文上に登場する。井上（1987）は、血縁・地縁をのぞく全てを「社縁」にカテゴライズすることへの疑問から、社縁の中身を再検討し、社縁の形態を3つの切り口から分析した。そのうちのひとつが「趣味縁」である。これは当時の社縁が、何らかの目的や目標を機縁にその達成のためにつくられる「目的志向型」の結社から、同好の士という機縁によって活動そのものを目的とする「愉しみ志向型」の結社へと傾向を変化させていた様を表す呼称であった。そして、この「愉しみ志向型」な「趣味縁」を好む傾向を、加入と脱退が選択自由で集団内の統制がゆるやかな人間関係という、もうひとつの社縁の傾向とあわせて重要視している。

井上は趣味的な社縁が出現している状況を表現するために「趣味縁」の語を

[2] 大内は大衆文化について、「社交的スポーツ、日帰り性レジャー、旅行などの「娯楽型」文化」「自己鍛錬をめざすスポーツ、趣味、教養・鑑賞活動などの「教養型」大衆文化」等と分類したり、「音楽教室、茶道などの「けいこ・趣味」」という言葉で記したりと（大内 1979：18）、1970年代当時の感覚で趣味の語をカテゴライズしている印象である。ゆえに、いわゆるアイドルファンやアニメ聖地巡礼といった現代的な趣味活動などは全く想定されていないと言ってよかろう。それでも、趣味を通じて生まれる人間関係としている以上、趣味縁の意味合いは大方近年の趣味縁研究でのそれと同義であると考えられる。

用いたが、趣味縁を直接論じた最初の論考とみられている（加藤 2017：47）藤田（1991）の場合は、日本の社会形態が「分節型社縁社会」から「クロスオーバー型趣味縁社会」へと移行していったとの指摘の中で「趣味縁」の語を提案した。つまり、近代産業社会では、学校、職場、家庭・地域という 3 つの時空間に生活が分割されていたが、高度経済成長期以降、そのような境界が解体され、3 つの空間・諸活動が相互に入り組み重なり合う社会へと変化していったと分析したのである。しかもそうしたクロスオーバー型な社会では、血縁・地縁・社縁とは異質な新しいタイプの人間関係が拡大しており、その関係成立の契機が〈趣味・好み〉の共通性にあるとして、藤田はこれを重要視し「趣味縁」と呼んだ。別な言い方をすれば、普段身を置いている社会的属性、血縁・地縁・社縁といった旧来型の枠組みを飛び越えて人間関係を築く力が、趣味に見出されていたのである。

しかしやはり「趣味縁」への注目には、2011 年の浅野智彦『趣味縁からはじまる社会参加』の上梓が大きく寄与したと言ってよいであろう。浅野にとっての趣味縁は、字義の通り、趣味によってつながる人間関係を意味する。そして浅野は、若者を社会参加に導く道筋のひとつに趣味縁があるのではないかと考え、特に親しくない他者とも協調していくための作法、すなわち公共性を趣味縁が育んでくれる可能性について検討を行った。つまり、趣味を介したつながりの現代的な有様に言及するだけでなく、その社会的な効果に関心をもって、趣味縁の語を扱ったのである。

CiNii で検索した様子からも、ちょうどこの浅野の論考が発表されたのを皮切りに、「趣味縁」の語を用いた論文が一気に数を伸ばしているが、それら趣味縁研究や趣味によるつながりに関する研究を概観すると、大方次のようなタイプに分けることが出来る（髙木 2021）。まず、浅野（2011；2012）や辻（2015）のような若者研究の一環としての趣味縁研究があり、これは趣味縁という括りであらゆる趣味のつながりを考察し、その役割を追究するものだと言える。これを包括的なタイプの研究とすれば、一方で、個別の事例を取り上げて研究したものも複数蓄積されている。それには、コミュニティカフェなど文化・趣味

で交流する地域のプラットフォームを調査したもの（地域型趣味縁）や、アニメファンのように特定のコンテンツの愛好者のつながりを分析したもの（ACG[3]型趣味縁）、そしてアニメ聖地巡礼に代表されるように地域と何らかの趣味コンテンツが結びついた事例を対象としたもの（地域型×ACG 型趣味縁）がある。そしてこれら事例研究のものを含め、基本的に趣味縁の研究には、趣味縁に地域活性化や新しい紐帯の形成といった肯定的効果を見出し期待するものが多かったと言える。

2.4　本稿の目的――趣味縁の「光」と「影」を考える

他方、これら趣味とつながりに関する研究の中には、その否定的な側面に論及しているものもないわけではない。例えば菅谷（2020）は、SNS を通じて誰でも参加できる市民ランナーのコミュニティについて、趣味縁概念に依拠しつつ観察・検討したものだが、そこではメンバーの固定化が起きた上、ランニングへの志向性の差異、仲間意識の濃淡に起因した対立や離脱が発生し、コミュニティの排他的な一面が顕れたことが報告されている。思えば、趣味による縁とは、新しいネットワークとして様々な人々を包摂する可能性を持ちながら、先述したように、人々を排除する可能性も否定できない縁なのではないか。

しかし、こうした趣味縁の肯定的側面と否定的側面――「光」と「影」は、これまで個別の研究の中で論及されるにとどまっており、知見が点在している状態である。これらを包括的に検討することは、趣味でつながること、「好き」の共通性でつながること全般の意味・効果を見通す上で重要であると考えるが、現状ではまだ未着手な論点だと言える。

そこで本稿では、趣味縁に期待される正の効果（「光」）を精査するとともに、その負の効果（「影」）を検討し提示することで、趣味縁の持つ性質や効果の両義性を考察し、今後ますます存在感を高めるであろう趣味的なつながりの将来性を展望することを目的とする。

[3] ACG は、アニメ、コミック、ゲームの略である。

なお、先の藤田（1991）は、趣味縁の「影」を早いうちから指摘していた貴重な論考である。詳細は第4章で触れるが、藤田はおおよそ次のような警鐘を鳴らしていた。すなわち、趣味縁が任意的な関係性であるということや、〈好み〉という構造的根拠も合理的根拠もないものを契機としているということが、非常に強い排他性を発揮しかねないという見解である。藤田はこうした趣味縁の可能性と危険性を、「良さであると同時に欠点でもある」（藤田 1991：30）と表現している。これは、ある側面においては長所とみなされるものが、別の側面から見ると短所となる可能性を示した、非常に示唆的な論及だと言えよう。本稿ではこの指摘を念頭に置きながら、趣味縁にこれまでどのような否定的効果――「影」が指摘されてきたのかという観点にとどまらず、その「影」を趣味縁の「特長」とみなされてきた要素――「光」とも突き合わせて考察することによって、藤田が着眼したような「良さであると同時に欠点でもある」性格をも描き出していきたい。

3．趣味縁の「光」――肯定的な側面

本章では、趣味を通じたつながりに関する先行研究を精査し、趣味縁にこれまで期待されてきた肯定的な性質や効果について検討していく。以下、提示するのは主に4つの「特長」である。

3.1　自由な縁であるということ――自由選択性、非拘束性の観点から

前章の趣味縁研究史において確認したように、趣味縁は血縁・地縁・社縁とは異なる特徴を持つ縁として語られることが多かったが、そのことは、これら従来型の共同体の持つネガティブな側面を克服するものとして趣味縁が展望されてきたということをも意味する。

本節では、趣味縁が個々人の自由意思に基づいて築かれる縁である点にフォーカスし、主体の自発性に依拠した特徴としての自由選択性と、それとセットで機能する、趣味縁の構造的な特徴としての非拘束性・開放性とを取り上げたい。

3.1.1. 自由選択性――選択縁としての「特長」

前章でも確認したように、かつて日本人の生活と社会的所属、人間関係の根幹を成してきた血縁・地縁・社縁（ここでは会社縁の意）といった中間集団は、家族関係の変化や地域役割の縮小化、企業共同体の解体・非正規雇用の拡大といった変化に伴って衰えていった（石田 2011 など）。「「そこにある」関係」（石田 2011：15）、言い換えれば「所与のもの」として考えられてきた血縁・地縁や、人々を拘束しつつも福祉の一端を担ってきた社縁とは異なり、個々人が自らの意思で獲得・構築し維持する人間関係が重視されるようになったのである。

こうした「当事者たちの積極的関与によって成り立つ人間関係の最大の利点は、行為者個々人が自らの好みに合わせて関係を構築および消去できること」であり（同書：17）、これは趣味縁の特徴でもある。どのような趣味で、どの縁につながるか。それを個々人の意思で自由に選ぶことができる。また、社縁のような経済的源泉ではない以上、その関係から抜けることも「自由」である。趣味縁は、現代的な人間関係の形態とその需要をよく反映しているつながり方だと考えられよう。

この自由選択的な性質は、これまでの趣味縁に関する先行研究でも長く指摘されてきたもので、趣味縁最大の「特長」と言っても良い。その理由は、趣味縁が当初、社縁の新しい類型として捕捉されたことによる。井上（1987）・上野（1987）はともに、血縁・地縁を除く全ての人間関係を「社縁」（すなわち、何らかの目的を機縁に人為的につくられたつながり）と呼びならわすことについて、もはやその概念一つで括ることには無理があるとして、社縁の変容と拡大を反映した新しい概念を模索した。

井上は社縁を、その結合の契機の特徴によって「趣味縁」「選択縁」「情報縁」の 3 つに要約することで、新しい社縁の説明を試みた。このうち「趣味縁」は先述の通り、社縁は本来、何らかの目的や目標の達成を目指してつながる「目的志向型」のものであったところ、それが段々と、むしろ活動そのものを目的とし、同好の士との人間関係を愉しみとする道楽的な、「同好会」的な「愉しみ志向型」の社縁へと変容している状況を指摘したものである。そして、この趣

味縁と相まって新しい社縁の人間関係を特徴づけているというのが、2つ目の「選択縁」であった。これは、結社（社縁集団）は、一応は参加者の自由意思が前提となっているが、その内実は、一方には加入と脱退の選択の幅が狭い、選択拘束型の社縁があり、他方には集団所属の選択を自分の意思でかなり自由に決められる選択自由型の社縁もあるというように、2つの極がある。その中で、人々が選択拘束型の社縁集団を避け、選択自由型を志向するようになっているという分析である。井上は、先の「同好会」への志向はこの選択の自由の問題としても考えられるとして、「「趣味縁」を重視する私生活化の傾向と相まって、加入と離脱が自由で、集団内の統制がゆるやかな社縁の人間関係が、つよく求められているようにおもわれる」（井上 1987：253）と述べる。このように、趣味縁（愉しみ志向型）・選択縁（選択自由型）両者の特徴を絡み合わせた視線を社縁に注いでいるのである。

井上論文と同書籍に収録されている上野（1987）は、社縁の代表例である会社縁を念頭に、血縁・地縁・社縁にはともに、その縁や集団から降りられない、避けられないという意味で「選べない縁」であるという共通した性格があることを指摘した。すなわち、血縁・地縁は成員を選べないと同時に、降りることも難しい。また社縁は本来、こうした拘束性の強い関係に対し、加入・脱退の自由な第2次集団を指す為に作られた用語であったが、企業が経済的源泉を担っている以上、簡単には抜けることは出来ず、結局離脱に関しては拘束性を持つことになるのである。上野はこれら3つの縁とは異なる「互いに相手を選び合う自由で多元的な人間関係の領域が拡がってきた」（上野 1987：228）として、社縁とは違う「選べる縁」としての「選択縁」を提案した。そして、選択縁の「純粋なモデル」には「血縁・地縁・社縁のいずれからも自立した、趣味や信条の集まり、たとえば俳句の結社や日本野鳥の会のようなものを考えることができる」として、ここで趣味による人間関係を例示している（同書：232-233）。このあと上野は、選択縁と地縁の重なり合うところに出来る「不純なモデル」の好例に、都市の主婦層の作り出すネットワークを挙げるのだが、そこでもその特徴として、メディアに媒介された趣味やライフスタイル、価値観、イデオ

ロギー等の何らかの目的意識の共有を指摘している[4]。

このように、井上は社縁の一傾向として、また上野は社縁とは異なる新しい縁として、という違いはあれど、どちらの研究にも加入と離脱を自由に選べる縁・「選択縁」という観点を持ち、それに伴って拡大する趣味的なつながりを重要視したという共通の認識が伺えるのである。

地域型趣味縁を研究対象とする加藤（2017）も、これまでの趣味縁研究に共通する特徴のひとつに「選択縁であること」を挙げ、上野の指摘を現代的な問題に引きつけてまとめ直している。「特に 2017 年現在の日本社会では、中途離職者が再度正社員として雇用される可能性は決して高くない。臨時職として再就職しても、給与や福利厚生などの待遇が往々にして前職より格段に低くなる。市民が会社縁を降りる自由は生計リスクと表裏一帯（ママ）であり、選択縁と言いながら実際には、おいそれとは降りられない。これに対して趣味縁は、生計や教育とは原則無縁の領域にあり、当事者の興味関心次第で任意に「選べる縁」であり、原則本人の自由意思以外に拘束性が無い」（加藤 2017：49）。この拘束性のなさは、趣味縁の自由選択性を実現する構造的な特徴としてセットで重要なものであるため、続く節で詳述したい。

3.1.2. 非拘束性・開放性――弱い紐帯ゆえの所属の気楽さ

主体にとっての自由選択性は、非拘束性・開放性という、趣味縁の構造的な特徴によっても支えられている。それは、成員の固定化による閉鎖性の助長や、凝集性の高まりによる同調圧力の増強を回避するための要点だとみなされてきた。

例えば池上（2005）は、近世の徳川日本において発達していた、趣味や道楽を仲立ちとした人々の結びつきに注目し、これがいかなる様相と役割を示していたかを詳細に検討した研究である。当時の人々は趣味仲間の組織につながることによって、武士や商人といった日頃の社会的身分とは離れた人間関係とア

[4] 井上は「目的」と相対するものとして「愉しみ」・趣味を捉えたが、上野は趣味的な契機も「目的」のうちに数えているものと考えられる。

イデンティティを獲得することが出来た。そして池上は、そのつながり方が自発的・水平的であるだけでなく、柔軟でゆるやかなものであった点に注意を促す。「強烈な結合力をもつ水平的結社組織が覇権的な力を手に入れれば、たとえもともとは自発的結社であっても、自分の組織のメンバーに対して息の詰まるような規律を課す一方で、他の人びとを排除しにかかることもあるだろう。それとは対照的に、比較的その場その場的な形の切り換えやつなぎ直しを許容するようなネットワーク連結をもつ社会は、個人に力を与え、本質的に開放的かつ柔軟な社会だと言うことができよう」（池上 2005：19）。池上はこうした趣味道楽の結び付きの「比較的気軽に出入りできる」ところを、「弱い紐帯がもつ強さ」（Granovetter 1973=2006）のひとつであったとみて重視している（池上 2005：18）。

そして、近年はSNSをはじめとするインターネットを介した趣味縁によって、この非拘束的なつながりの長所をより如実に見て取ることができる。

池上の視点は、非拘束的で開放的な組織であるということを、人々の活動力のみならず情報流通の観点からも重視するものであるが[5]、杉山（2021）もこの視点を援用して現代の趣味縁を考察している。杉山は、江戸時代のアマチュアたちの俳諧作品を集約し可視化し面白くしていたのが、会所や小冊子といった文化仲介者・メディアであったことに着目し、それと同様の役割を現代のSNSが担っている可能性をインタビュー調査により追究した。その結果、SNSが「弱い趣味縁」を築き、趣味にさらなる面白さをもたらす様子を提示している[6]。この指摘からは、趣味縁が「弱い紐帯」であることの意義が現代においてもはたらいていることが感じられよう。

---

[5]「政治的な絆や領域的・血縁的な絆」は、抑圧的・閉鎖的な側面を持ち、且つ新しい見方や情報をもたらしにくいという欠点を抱える（池上 2005：18）。血縁・地縁・社縁にも同様の指摘が出来よう。池上はこうした絆を「弱い紐帯」に対する「強い紐帯」であると位置付けている。

[6] 杉山は、趣味縁が「弱い紐帯」であることによって、そこにつながる人々にとって新しく且つ理解可能な情報が流通し、趣味がより面白くなる効果が発揮させると考察して、これを「弱い趣味縁の面白さ」と呼んだ。

また須川（2021）による「2.5 次元舞台」ファンへの質的調査でも、「少しでも嗜好が合わなければすぐ離脱することにつながるが、「いやだったらすぐ抜けられる気軽さがいい」」（須川 2021：213）という当事者の語りが紹介されている。これは、成員が趣味縁を意図して「弱い紐帯」として扱うことによって、非拘束性を担保しようとする行為とも考えられるのではないか。そこにあるのは、「弱い紐帯」ゆえの所属の気楽さである。

このように、趣味縁には旧来型共同体に比べ利害やしがらみのないことによる非拘束的・開放的な性格が指摘されてきたが、それらは個々人が自ら構築する人間関係という、近代化・個人化を反映したものであると同時に、人々のつながりに対する一定の需要を満たすものともなっている[7]。

3.2. 異質な他者同士を結び付ける架橋性――橋渡し型社会関係資本の観点から

先述の通り趣味縁は、血縁・地縁・社縁を越えた、新たなヨコのつながりを築くものとして捉えられてきた。それはすなわち、とかく同質的な友人関係に偏りがちな社会の中で、異質な人同士を対等な関係でつなぐ可能性を生み出し、異質な他者に対して共感する機会を醸成する効果が見出されているということである（長崎 2021）。この性質は、池上の用いた「弱い紐帯」理論のみならず、橋渡し型社会関係資本の観点からも数多く検討されてきた。本節ではこの点について先行研究を整理していくが、まず前提事項として、社会関係資本について簡単に確認しておこう。

社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）は、「社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」（Putnam2000=2006：14）と定義される概念で、信頼に基づいた他者とのつながりを、その人の、且つその社会の資本とみる考え方である[8]。社会関係資本にはその特徴によって様々な分類が提唱

[7] 加藤（2016）が調査した札幌市の趣味活動プラットフォーム・「OYOYO」での活動は、非拘束的であっさりとした人間関係を好むという現代的なつながりへの要求に合致した活動パッケージとなっていることが、参加への敷居の低さや流動性を実現している一要因であると分析されている。

されているが、最も大きなものとして、結束型社会関係資本と橋渡し型社会関係資本という分け方がある。結束型は、特定的信頼に基づいて同質な者同士が結び付くタイプを指す。他方、橋渡し型は、一般的信頼に基づいて異質な者同士が結び付くタイプを指す。つまり、社会的属性を越えた人々のつながりには、橋渡し型社会関係資本をもたらす可能性があるということである。

そもそもパットナムは、民主政治の活性化に寄与するものとして社会関係資本を見出したわけだが、そこでは社会関係資本を醸成する鍵として、人々が自発的に組織する二次的結社が取り上げられていた。この二次的結社の例には「アマチュア・サッカー・クラブ、合唱団、ハイキング・クラブ、野鳥観察クラブ、読書会、狩猟協会、ライオンズ・クラブ等」といった、リクリエーション団体・文化団体が挙げられ、その数の多さが重視されている（Putnam1993＝2001：110）。浅野は、これらの結社がみな趣味を仲立ちとしたものであることに着目し、「趣味縁こそが二次的結社の、したがって社会関係資本の典型である」と主張した（浅野 2011：46）。趣味集団に所属したり、趣味を介した友人ネットワークを持ったりすることが、人々に橋渡し型社会関係資本としての機能を提供していると考えたのである[9]。浅野の趣味縁論においてこのことが示す意味は、「社会関係資本の機能は、仲のよくない相手とでさえも必要に応じて協力を調達できるような作法を身につけること」（浅野 2011：51）、すなわち人々の公共性を育んでくれるというところにある。同じ趣味を愛する者同士は、その「趣味への愛」（同上）ゆえに対立することがあっても、趣味を通じた互いへの敬意や謙虚さがあることによって、その葛藤を克服していくことが出来る。この交渉のプロセスが、人々に公共性をもたらし、旺盛な社会参加が可能になるための基礎能力を育んでくれる――これが浅野の趣味縁論の本旨だと言えよう。

実際に、趣味縁に対するこうした予測は、個々の趣味縁を追究した事例研究

[8] 社会関係資本の定義や捉え方は論者によって異なるが、本稿ではロバート・パットナムの説を用いる。

[9] 浅野は趣味縁の下位分類として、趣味集団と趣味友人を設定し、特に二次的結社の形態をとる趣味集団に注目した。

においても示されている。例えば谷村（2019）は、「アニメ聖地巡礼」現象を対象に「聖地化」の過渡期におけるアニメファンと地域との関わり合いについて研究したものである。そこでは、ファンたちが作品の舞台となった沼津市で「勉強会」や清掃活動などを行ったことが、ファン同士やファンと地域住民との間に橋渡し的なネットワークと信頼関係、「互酬性の規範」を築き、橋渡し型社会関係資本を醸成する機能を果たしたという（谷村 2019：86）。

また土屋（2020）は、浅野の趣味縁論を踏まえながら、近代の秩父地方を中心とする地域を対象に、その絹取引による経済活動と俳諧ネットワーク、秩父困民党事件をはじめとする政治活動という、趣味縁と社会参加の関係性を分析したものである。この地方の俳諧ネットワークは、生糸の流通ルートを介することで拡大したと推察され、それが都市部との活動交流を可能にしただけでなく、政治的動向を知り、問題意識を醸成・共有する役割をも果たしていたとの考察が示されている。つまり、「非常に高い公共性を帯びる可能性があることが明らかとなった」（土屋 2020：21）。

このように趣味縁は、血縁・地縁や従来の社縁とは異なるという点に加え、それらを超えてつながるネットワークであるという点で、もともと「橋渡し型」の性格を期待されていた（髙木 2021）。またそれだけでなく、趣味を介することで人々の間に一般的信頼とそれに基づく付き合いを生み出し、社会に公共性の新しい土壌を提供すると目されてきたのである。

一方、趣味縁を社会関係資本とみる見方には疑義も示されている。浅野（2011；2012）は、日本の若者を対象とした量的調査を実施し[10]、趣味縁と橋渡し型社会関係資本との関係を分析したが、その結論部では、日本の若者に対してパットナム型の社会関係資本論をそのまま適用することには慎重であるべきとの見解を示した。橋渡し型社会関係資本の構成要素である一般的信頼と趣味的結社への加入との関係や、また趣味友人の有無と社会参加との関係に、統計学的な有意性が見出されなかったことが主な理由である[11]。

[10] 青年文化研究会が 2007 年度に東京都杉並区在住の 16 歳～29 歳の男女を対象に実施した、趣味活動や公共的活動に関する意識調査。

辻（2015）も同じ調査をもとに、趣味縁の中でもとりわけ趣味友人に着目して分析を行ったが、若者たちの「趣味縁的ネットワーク」には異性や異年齢の比率について有意な差が見られなかったとして、趣味縁が本当に異質な他者との出会いをもたらすかどうかについては懐疑的な姿勢を示している。

ただし、これはあくまでも若者を対象とした分析結果である。また、因果関係を立証するものではないことにも注意が必要であろう。本節ではこれらの調査を踏まえつつも、趣味の共通性を契機とする縁は、人々に普段の生活環境では想定できないような予期せぬ出会いをもたらすものであり、これが橋渡し型社会関係資本および公共性の土壌として肯定的に評価されてきたという点を、趣味縁の「特長」としておさえておきたい[12]。

3.3. マルチ帰属・多元的所属性――リスク・マネージメントが可能

趣味でつながる縁は主に選択縁の探求の中から指摘されてきたが、その延長線上には「他の縁と掛け持ち出来る」という特徴があった。池上論文で言えば、武士や商人といった社会的属性に基づいた縁（職縁）に生活しながらも俳諧の縁にも繋がっている様子がこれであり、また上野（2008）がその女縁論の中で紹介した「マルチ帰属」もこれに当たるだろう。上野は、一人の専業主婦が仏教美術の会という趣味のグループのほか、複数の市民運動的グループに所属している様を例示し、それら彼女の所属する複数のグループのメンバーが互いに重なり合っておらず、彼女がそれぞれで見せる顔を双方のメンバーが知らないでいるという状態に関心を寄せた。そして、そのような「マルチ帰属」なあり方は、自己実現を一つのグループにかけることの危険性を回避し、自己のアイデンティティの多面性を上手く配分するアイデンティティ操作――「「あちらが

[11] 調査の分析結果によれば、日本の場合、若者の一般的信頼を押し上げているのは趣味集団への参加よりも日本への誇りや生活満足度であったという。浅野はこれに対し、「一般的信頼がほんとうに「一般的」であるのかどうかに対して疑問をなげかけるものであろう」との見解を示している（浅野 2012：268）。

[12] ただし、「異質な他者」と言ったときの「異質さ」の性質は個々の趣味縁（研究）によっても想定されるものが異なってくるという点には留意したい。（髙木 2021）

ダメならこちらがあるさ」というマルチ・チャンネルのリスク分散」をしているのだと、肯定的に考察している（上野 2008：152）。浅野（2011）もこの上野の指摘を引きつつ、こういった人間の自己の多元性や多元的所属の効果に、公共性・社会参加に深く繋がるものとして注目した。実際に、先述の趣味縁調査のデータを用いて浅野が行った分析では、趣味集団に加えて宗教集団や労働組合といった別の種類の集団に所属している場合、政治参加への志向が強くなる傾向が示されている。

この「集団所属の多元性」について浅野は、複数の趣味集団に所属している場合でも同様の効果が得られるのかどうかまでは分からないとしているが、血縁・地縁・社縁と違って、自分の意思で所属する数もその種類も選択することができ、様々な自分を実現できるという点は、総じて趣味縁の長所とみられてきたと言ってよい。

加藤（2017）は、趣味縁をめぐる先行研究が共通して指摘してきた特徴として、先の「選択縁であること」の他に「社会的「有用性」からの逸脱」と「所属する社会集団内での既存の役割からの解放（脱役割）と変身が可能」の 2 点を挙げている（加藤 2017：52）。その意味は、趣味縁が、効率性や経済性と結びついた職場や学校等の帰属集団では発揮し切れない、個人のアイデンティティや潜在技能、己の全人性を自由に実験し表現する場所を提供していることを指す。渡部（2016）は趣味縁への需要を、社会関係の個人化によるアイデンティティ不安を解消するための志向だと考察しているが、先の片岡（2019）の指摘でも、趣味による友人ネットワークが自己表現の基準となったことが示されていた。このように趣味縁は、個人のアイデンティティを文化活動を通じて創り出すルートとして、人々に複数の機会を与えうる。

多元的所属性は、本人の意思や当該趣味の置かれた環境いかんで、人々が複数の趣味縁をもつことを可能にするだけでなく、そのマルチ帰属性により、「アイデンティティのリスク・マネージメント」（上野 1994：148）――まさに、個人化した社会においてアイデンティティをめぐるリスク対応を可能にする特徴なのである。

3.4. 小括

ここまで本章では、自由選択性や非拘束性・開放性、橋渡し型社会関係資本性やマルチ帰属の可能性といった特徴を、趣味縁の肯定的側面として整理してきた。そしてこれらの要素は相互に連関するものだと言える。すなわち、非拘束的で緩やかな紐帯であるという構造的な特徴は、個人が自分の意思で加入や離脱を選べるという自由選択性と相互に支え合うものであり、これが趣味をきっかけとした様々な人々の出会いを実現するのである。そして、同じ趣味への愛によって、異質な他者同士が協調し交渉するプロセスを導き、結果的にそれが社会の公共性醸成に一定の効果をもたらすことも、趣味縁には期待されてきたのである。

4．趣味縁の「影」――否定的な側面

前章では、趣味縁に指摘されてきた肯定的側面について整理・検討した。しかし、趣味縁がもたらすものは、こうした正の効果にはとどまらない。本章では、その他方で懸念される否定的な側面について先行研究に依拠しつつ、考察を加えながら精査・提示していく。

4.1. 縁の獲得に生じる格差

血縁・地縁・社縁といった旧来の中間集団は、良くも悪くも生まれながらにして、住みながらにして、また入学・就職といった社会イベントの同時性に乗りさえすれば、ほぼ自然に与えられるものであった。しかし、個々人が自ら構築するという現代的な人間関係には、この「所与のもの」でないことによる、持てる者・持たざる者の格差がともなう。第 2 章でも触れたが、この問題を渡部（2016）は、個人化の進んだ日本社会における（趣味コミュニティを含めた）新しい〈つながり〉の課題として、「〈つながり〉への接続可能性の格差化」と呼んだ。つまり、「高い対人能力を有する者のみが〈つながり〉に接続でき、そうでない者は孤立せざるを得ないという格差状況」（渡部 2016：93）を生み出しかねないという指摘である。同様に、趣味縁を獲得できるか否かは、自ら積極

的に関わっていく意思や行動力、そもそも趣味や同好の士を見付けることが出来るか否かという運などに大きく依拠していると言えよう。

〈つながり〉への接続可能性の格差に加え、渡部が投げかけた2つ目の課題「〈つながり〉の持つ機能の限定性」にも目を向けたい。それは、趣味縁やボランタリーな〈つながり〉はアイデンティティ不安を解消する可能性はあるが、経済的な不安を解消し得るものであるとは言えないとの注意である[13]。一方で、選択縁研究の中で上野は、「加入・脱退が自由で拘束性がない」という性質のゆえに、「集団としても不安定だし、安定したアイデンティティの供給源ともなりにくい可能性がある」と「弱点」を指摘していた（上野 1987：230-231）。

この不安定さと、先の「所与のもの」でないこととに関係する問題として、次節では資格性という観点を採り上げる。

4.2. 資格性の曖昧さ

接続可能性の格差化と関連して、資格性の曖昧なものが多いというのも趣味縁の特徴である。血縁は、その家族に誕生することによって成員としての資格が生まれる。地縁は、そこに積極的に関わっていくか否かは本人次第だが、当該地域に居住・生活していることによって一応は自動的に資格性の基盤を得ることが出来る。そして社縁は、会社縁における雇用関係や学校の学籍のように、往々にして客観的な成員資格を伴う。しかし、趣味縁の場合、資格性は血縁・地縁のように自然・半自然に得られるものではなく、また社縁のように明確な成員資格を付与されるものでもない。クラブや教室といった会員制の習い事・趣味集団を除けば、趣味縁の成員資格はもっぱら内的感情・外的感情に依るもので、確たるものではないと言ってよいであろう。

ここでいう「内的感情」とは、その趣味が好きであり、自分はそのコミュニティの一員であるという自己認識のことである。例えば、その趣味に「飽き」

[13] ただし、趣味縁が経済的不安の解消に寄与した例もあるようである。第2章で紹介した、BTSファンの行った互助がまさにそれであろう。コロナ禍という非常事態における事例ではあるが、趣味縁を通じた経済的な支援という点で注目に値する。

を感じたり、何らかの原因で好きでなくなったり、経済的理由等で趣味活動が困難な状況になったりすることによっては、内的感情は弱まることがある。一方「外的感情」とは、他の成員からの評価のことを指す。趣味の創作物や成員としてのふるまいに対する、他者からの否定や「評価」の低下といった外的感情の変化は、趣味コミュニティからの脱落を招きかねない。つまり、趣味縁は血縁・地縁・社縁以上に、成員としての資格性に揺らぎが生じやすい縁だとみえる[14]。そしてこの内的・外的感情は、相互に補完的であるとも言えよう。その好例に、岡澤・團（2017）による、小説の読書を趣味とする人を対象とした調査を挙げることが出来る。岡澤・團はこの中で、「どのような趣味をお持ちですか」と問われた回答者が「趣味」を「好きなこと」と言い換えたり、「ちゃんと言えるような趣味がなくて」とわざわざ前置きしてから答えたりしている点に注目し、こうした述べ方から次の2つの要点を見出した。すなわち「わたしたちがある活動や文化消費を自分の「趣味である」と述べるとき、そこにはただその活動をした経験があることや文化消費の習慣がある以上のなんらかの資格が求められることがありうるという」点と、「あるものを趣味だと呼ぶときに用いることのできる資格の種類はそれぞれの文化消費のあり方に深く規定されている」という点である（岡澤・團 2017：145）。これは、趣味自認にかかわる趣味の資格性とその種類の多様性についての重要な指摘だと言えよう。何かを自分の趣味だと言うからには、そこに他者を納得させるだけの「資格」がなければならない。そしてその線引きの基準は、それぞれの趣味の内容によって

[14] 例えば、二次創作を行う腐女子のコミュニティを調査対象とした大戸・伊藤（2019）では、意思表示をするということがコミュニティへの所属において重要な意味を持つことを明らかにしている（なお、ここで腐女子とは「（少年も含む）男性同士による恋愛を主題とするフィクションや想像などを嗜好する女性のこと」（大戸・伊藤 2010：69）と定義されている）。オンライン上でコミュニケーションを行う匿名性の高い人間関係は、「その都度の興味関心」（大戸・伊藤 2019：227）、すなわち本稿で言うところの内的感情に基づいてコミュニティへの所属が可能だが、その枠組みは不明瞭である。そのため、自身の所属意思を常に成員に対して示し続けなければならない。腐女子コミュニティにおいてそれは、二次創作の原作やキャラクター、カップリングに対する「愛」を主にSNS上に常時提示することだという。

もまちまちである、ということに岡澤・團は注意を促していると言えよう。趣味自認は往々にして、他者からの評価や期待される能力を念頭に置きながら形成されるものでもあるのである。

このように、経済的・アイデンティティ的基盤としての弱さを指摘されてきた趣味縁であるが、その弱さの根幹のひとつは、こうした資格性の曖昧さによっても検討することが出来る。

4.3. 異質性が見えない付き合い方――「沈黙のマルチ帰属」・異質な他者の集まりの同質化

4.3.1. インターネット・SNS の観点から

インターネット・SNS の拡大とその利用は、同好の士の発見を格段に容易にしただけでなく、その縁を維持する行為を通して、他者とのつきあい方一般にも多大な影響を与えていると言ってよかろう。特にインターネットに通じている若年層の様相は、こうした現代的な趣味縁のかたちを検討するに当たって適例だと言えるが、彼らのつながり方にはレイヤー化・細分化が指摘されている。例えば片岡（2020）は、若者たちがよく好むポピュラー文化が、多くのジャンルや好みに細分化・断片化されていると指摘した。そしてさらに、女子オタクへの調査を通じて、同じテーマの下でも細かい価値観の合う／合わないによって多層的に繋がり、複数の SNS アカウントを使い分けるようなつきあい方――「レイヤー化した繋がり方」が常態化している様子を報告している。ここで確認したいのは、彼らが細かいジャンルや好みによって趣味縁のチャンネルを切り替えるようなつきあい方をしているという点である。

なお、SNS についてはその性質にも注目すべき特徴がある。この点で先の杉山（2021）は、SNS の「フィード」機能[15]が「〈刺激的な隣人〉の活動を目にしたり、〈不特定の観衆〉から反応をもらったりすること[16]」を可能にしていると考察しており、示唆に富む（杉山 2021：107）。杉山は、会所や小冊子といっ

[15] フォローしたユーザーの投稿を一覧できる機能のこと（同書参照）

た江戸時代のメディアと現代のSNSに、可視化によって「弱い趣味縁の面白さ」を築くという共通の役割を見出したが、フィード機能や〈不特定の観衆〉の存在からは、両時代の間にある相違点についても考えることが出来よう。例えば、江戸時代のメディアが果たしていた、趣味に関する情報の流通や交流、発信の経路の確保といった役割に加えて、現代では上記のようなSNSの機能が、常につながり、常に見て・見られる環境をも整備しているという点が挙げられる。このことは、前節の内的感情・外的感情の問題、そして本稿冒頭で述べた常時都市効果に晒されている状態とも合わさって、インターネット時代の趣味縁の重要な論点を示していると言えよう。

さて、「レイヤー化した繋がり方」に加え、インターネットを介した趣味縁に関しては、インターネットそのものの性質が影響を与えているとして、「趣味縁の逆説」を指摘する次のような先行研究もある。長崎（2021）は音楽趣味を題材に、「一番好きなミュージシャン」が人と被らないといったように、インターネットが趣味を細分化していった点を指摘する。長崎は、同質な者同士で固まりがちな社会において、趣味縁が異質な他者同士の対等なつながりと共感の機会を生む可能性があることに注目し、さらに浅野の趣味縁論が示した、「趣味への愛」が趣味縁内にもたらす葛藤とその克服という討議プロセスを参照して、これを民主主義の基盤となる理想的な社会関係であると評価する。しかし、その上で、こうした趣味縁の基盤を掘り崩すような事実があると主張した。それはすなわち、「趣味への愛が深い人たちは好みがバラバラすぎて、互いにつながること自体難しい」（長崎 2021：58）という問題と、インターネットのもたらす情報の均質化および選択的接触の助長である。

まず長崎が注目したのは、Googlearchyという言葉に象徴される、サーチエ

[16] この2つの概念は、SNSに写真を投稿しているアマチュア写真家へのインタビュー調査から提示されており、〈刺激的な隣人〉とは「共同の作品制作はしないが、それぞれが自分の興味を追求している姿をSNSの投稿から目にすることができ、それが刺激になる他の写真家たち」を表し、また〈不特定の観衆〉とは「SNSにアップロードした写真をたまたま鑑賞し、「いいね」やコメントの形でフィードバックを提供する人」を表す概念だとされている（杉山 2021：104、106）。

ンジンによるサイト間格差の拡大と固定化である。検索結果の上位にあるサイトばかりが閲覧されヒット数を伸ばすといった状況は、人々の知識の均質化を招く。そして2つ目に、趣味の受け手側の行動として、AIやビッグデータによる「あなたへのおすすめ」機能が人々の選択的接触を助長する危険性を取り上げた。インターネットによって人々の趣味活動は、「おすすめ」された選択的接触を通して、予測可能な範囲の、自分の好みに合ったものにとどまり、かつその範囲内の情報で均質化していく。長崎が問題視したのは、好みの細分化と均質化、そして選択的接触が同時進行することで、「偶然の出会い」、すなわち異質な他者との出会いが発生しにくい状況が出現しているのではないかということであった。

4.3.2. 異質性を管理する様子から

浅野が指摘していたのは、あくまでも同じ趣味・好みの仲間であることを前提に、その趣味集団の「中」で何らかの衝突が発生した場合、そこで当該趣味へ向けている「愛」が成員同士の葛藤の原因にもなる一方で尊敬や敬意といった承認関係をも生成して、結果的に葛藤を克服するかすがいとしても機能するのだという理屈であろう。ゆえに、長崎の示す「趣味への愛が深い人たちは好みがバラバラすぎて、互いにつながること自体難しい」という指摘は、主に社会に趣味縁が形成されていく経過やその可能性という「外」の問題に向けられている点で、浅野の仮説に対する直接の反証にはならないかも知れない。しかし、この論考の重要性は何よりも、その「異質な他者同士の出会いと衝突」を前提とした趣味縁観が現実と乖離している可能性を示した点にある。

ここで、共通の趣味によってつながる人々が互いに異質性を管理する様子を、先行研究から考察したい。大戸・伊藤（2019；2020）は、腐女子の同人作家コミュニティを対象に、彼女たちが年齢や学歴といった互いの異なる属性や非対称性をどのように内部で処理し、趣味活動の場を形成・維持しているのか、浅野の言うところの「つながりの作法」を観察し検討した。これによれば、彼女たちは（1）匿名性の徹底、（2）作品やキャラクターに対する解釈への相対主

義的関与と同人作品へのオリジナリティの要求、（3）金銭的話題の忌避という、3つの規範意識をコミュニティ内で徹底しており、こうすることで、属性の非対称性によって引き起こされる対立を未然に回避し、互いを肯定し合うつながりを維持しているというのである。大戸・伊藤はこの観察結果をまとめるにあたり、非常に示唆的な文言を用いている。「なぜ彼女たちはこのような匿名的で差異が隠されたコミュニティを形成しようとするのか」（大戸・伊藤 2020：161、下線部引用者付記）、そして「匿名性が担保され極めて高い類似性によって結びつくことで安定しているコミュニティ内において、個人間の差異や格差が可視化されることは、コミュニティの瓦解を招きかねない」（同書：162）。つまり、（ここで趣味縁の一種として捉えられている）趣味コミュニティは、高い類似性を持つつながりであって、なおかつ成員間の差異を可視化しないように、それらを隠して形成・維持されているものだと分析されているのである。

大戸・伊藤の研究を受けて、髙木（2021）は、「好きなもの」という極めて狭い1点でつながることが別の次元の同質性を築いているのではないかと推測し、社会関係資本論を援用しつつ、以下のように述べた。「趣味を仲立ちとすることが異質な他者への寛容・「信頼」を育み「互酬性の規範」を成立させているというよりは、趣味コミュニティを維持させるために「規範」を徹底させ、異質性を削ぎ落とすことで、互いへの寛容性を保っているという、一見同じようで逆のプロセスを踏んでいると捉えることが出来るのではないか。異質な他者が集まる場であることと、異質な他者を包摂しつつコミュニティが維持されていくこととの間には、こうした意味の違いがあると言えよう。いわば、趣味縁の持つ「互酬性の規範」のダークサイドである」（髙木 2021：412）。つまり、「趣味への愛」があることによって、異質さが規範と寛容を生むのではなく、異質さを削ぎ落として寛容になっているだけなのではないかという考察である。

ところで、「異質な他者との出会い」の前提には、成員が互いに別の縁にも所属しているという状態、すなわち「マルチ帰属」の可能性があったのだった。この「マルチ帰属」や、先ほど挙げたつきあいの「レイヤー化」、差異を隠した趣味コミュニティのつきあい方を勘案すると、ひとつの疑問が浮かび上がってく

る。それは、「異質性を見せない「マルチ帰属」はどこまで「異質な他者同士のつきあい」だと言えるのか」という問いである。成員が異質性をコントロールし、差異を隠してつきあい、さらに部分的でレイヤー化された関係を心がけるならば、その趣味縁に持ち込まれる異質性はかなり限定的なものとなってしまう。マルチ帰属と言っても、互いに異質な面には口をつぐんだ状態――言うなれば「沈黙のマルチ帰属」の状態であっては、交渉の発生する余地がなくなるのではないか。趣味縁になされてきた見立ては、決して趣味縁一般に広く適用できるものではないということが言えそうである。

この点について、社会関係資本論からも検討を加えたい。趣味縁論における「光」の特徴、なかでも橋渡し型社会関係資本に関する評価は、趣味の共通性によって知り合った異質な他者同士が交渉し合うことを見込んだものであった。しかもそれは、パットナムが橋渡し型社会関係資本の定義に用いる「一般的信頼」を育む機会を趣味縁に見出し、ここから他の縁にはない公共性の萌芽を期待しようとするものでもあった。その可能性は確かにあるが、しかし「共通の趣味・好みを持っている」という意味での同質性――つながるための条件を持つ以上、そこでは多かれ少なかれ信頼については一種の特定的な性格を帯びざるを得ない。ゆえに、趣味縁に対して橋渡し型社会関係資本としてのみならず、結束型社会関係資本としての物差しを当てることには一定の意義があるものと考えられる。

なお、これは推測だが、一般的信頼の点についてパットナムの枠組みが当てはまらなかったという浅野の趣味縁調査結果には、この「趣味縁には（結束型社会関係資本の要素である）特定的信頼の側面も多分にあるから」ということが一因として考えられるのではないだろうか。趣味における同質性や共感度に基づいてつながる行為が、さらに趣味の細分化とレイヤー化の煽りを受けるとき、趣味縁の副産物は一般的信頼の範疇にとどまらないのではないかと考える。無論、浅野らの報告は、趣味縁に橋渡し型社会関係資本性を見込んだうえで、一般的信頼や寛容度について調査し、分析したものであるから、そこから想定と異なる様相が示されたことは、決して筆者のこの推測と対立するものではない[17]。

しかし、本節の議論を踏まえると、趣味縁に対して一般的信頼ではなく、（愛国心なども含めた）特定的信頼の観点から追究することにも意義があると言えよう。

4.4.「好き」の排他性と拘束性

趣味縁における排他性の問題をいち早く指摘していたのが、「クロスオーバー型趣味縁社会」を提唱した先述の藤田（1991）である。藤田は当時の人々の状況を、包括的な血縁的・地縁的関係だけでも、また部分的・限定的だがしばしば拘束的で排他的な社縁的関係だけでもなく、多様な趣味的な関係にも同時にコミットするようになったと分析した。ところが、そうした「趣味縁的関係の拡大には危険性と可能性が胚胎している」として警鐘を鳴らすのである（藤田 1991：30）。それは、「〈趣味縁〉が制度的・組織的基盤を必要としない、打算的でない、任意的な関係であるだけに、非常に排他性の強い閉鎖的関係になる傾性をもっているから」（同上）だという。趣味縁の契機である「〈好み〉は構造的根拠も合理的根拠もなしに、他者（他のグループ）との差異を主張することができ、それが好みだという理由で、その主張を正当化することができる」（同）。つまり、非制度的で任意的な関係である趣味縁に排他性・閉鎖性があることを指摘したのである。これはいわば、「好き」の排他性とでも言える負の側面である。

一方で、これとはベクトルの逆な作用を懸念する指摘もある。先の高木（2021）は、ある趣味縁の中で何らかの「（互酬性の）規範」が機能しているという状態のためには、成員がその趣味縁に居留まっていることが必要だと考察した。換言すれば、所属に関して一定の拘束力がはたらいているからこそ、何らかの形

[17] パットナムの枠組みとは異なった結果のひとつである、若者の一般的信頼を押し上げていたものに愛国心（日本への誇り）があったことについて、浅野は「「たいていの人は信頼できる」と回答している人は、「たいていの人」という言葉で日本人のことだけを考えているのかもしれない」（浅野 2012：268）と述べている。回答者に一種の日本の若者特有の傾向を感じているものと推察されるが、これもまた、特定的信頼とともに重要な観点であろう。

で協調状態となるのである。そしてこの拘束力の源を、その趣味（の対象）が「好きである」という主体の心的状態に求めた。これは先ほどとは反対に、「好き」の拘束性と呼べるような特徴だと言えよう。

このように趣味縁には、排他的でありながら拘束性も持つという、両方向の負の効果を指摘することが出来る。

先述のような異質性を除去する作法は大方、誰かによって明文化されているわけではない。また、レイヤー化されたつきあいの中では、趣味の共通性に依拠した関係だということまでは認識できても、自分が相手にとってどのような基準に基づいたどの範囲までの関係なのかは曖昧なものである。ゆえに裏を返せば、趣味縁はいつ、何をきっかけに排除されてしまうのかが不明瞭な関係性でもあり、しかもその根底に「好き」「好み」という主観的・感情的な評価軸が伴いやすい。こうしたことからは、人々が「抜けられる気楽さ」として甘受している、離脱も選べるつながり方には、「排除」を排除として感知させない危うさも潜んでいるのではないかと考えることが出来る。

4.5. 小括

ここまで本章では、先行研究の指摘を踏まえながら、趣味縁の否定的側面・効果について考察を加えつつ精査してきた。その結果、接続可能性に格差がある点、資格性の曖昧さをはじめとする不安定さを持つ縁である点、「沈黙のマルチ帰属」等の異質性の見えない／見せない付き合いとなる可能性がある点、そして縁の要たる「好き」が排他的／拘束的性質を帯びる点という、4つの性質を提示するに至った。

次章ではこれらの「影」を、前章で検討した「光」の諸点と突き合わせて検証を行う。

5．趣味縁の「光」と「影」――考察のまとめ

ここまで本稿では、趣味縁の「光」と「影」の性質を考察・提示してきたが、改めて各項目を簡単に確認すると、以下のようになる。

光	影
自由選択性	縁の獲得に生じる格差
非拘束性・開放性	資格性の曖昧さ
橋渡し型社会関係資本性	「沈黙のマルチ帰属」状態
マルチ帰属・多元的所属	「好き」の排他性と拘束性

これら「光」と「影」の項目から浮かび上がってくるのは、趣味縁の持つ性質の両義性である。

趣味縁は選択縁の一種としての性格を持ち、参入も離脱も自らの意思で選び取ることが出来る縁である。そこには非拘束的で開放的であるという構造的要件も求められ、これにより成員の固定化や凝集性の高まりを防いで、「弱い紐帯」としてのつきあいの気楽さを担保していた。しかし自由に選べるということは、裏を返せば、血縁・地縁・社縁のようにあらかじめ用意されたりはしないということ、すなわち獲得可能性がもっぱら個々人の能力に依拠してしまっていることを意味し、新たな格差のもととなる性質でもあったのである。また、しがらみや利害のなさが可能にしていた筈の非拘束性や開放性についても、共通の何らかが「好きである」という趣味縁特有の契機によって、根拠のない排除を生み出したり独特の拘束力を帯びたりする危険性がともなう。

さらに、趣味縁には異質な他者とのつきあいをもたらし、趣味を仲立ちとして公共性を醸成するという、橋渡し型社会関係資本としての性質も期待されているが、その反面で、趣味の均質化・細分化やレイヤー化したつきあい方の拡大により、異質な他者との出会いそのものが望めなくなっているのではないかとの見方も示されている。趣味縁論が前提としてきた異質な他者同士の交渉のプロセスも、そこで成員が自らの異質さを管理しすぎると実現しにくくなってしまう。共通の好み・趣味を持つという1点のみをつながりの担保とする趣味縁は、その意味で特定的信頼で結ばれた結束型社会関係資本的な構造を一面に持ち、しかしそうでありながら、資格性の曖昧な、不安定な紐帯だとも言えるのである。

このように、趣味縁の肯定的性質は時として否定的性質にも反転し得る、「良さであると同時に欠点でもある」。

そして、これら「光」と「影」の項目のそれぞれの共通軸は、人々を包摂していく動きと排除につながる動きとして捉えることが出来る。例えば、自由選択的かつ開放的で橋渡し型社会関係資本性を持つという特徴は、広く開かれて人々を包摂し、自分とは異質な他者との交渉を誘発する。この点で、趣味縁の「光」の軸は公共性にあるとも換言できよう。しかし反対に、縁の獲得に生じる格差によってつながりに接続できない人々も発生させ、曖昧で恣意的な基準によって排除を引き起こす効果も想定されるのである。それだけでなく、本稿では論じなかったが、趣味への共感を主な条件とするような縁の形態は、悪意を持った参加者を阻止することが出来ず[18]、この意味でも「光」の軸とは対となる非公共性、公共性の侵害という「影」を避けられないと言えよう。

6．おわりに

本稿では、趣味縁や趣味のつながりに関する先行研究に依拠しながら、趣味縁に指摘されてきた肯定的側面や、懸念される否定的側面について検討を行った。これにより、自由選択性や非拘束性・開放性、橋渡し型社会関係資本としての性格やマルチ帰属の可能性といった、趣味縁の「光」として論じられる性質を炙り出したが、これらは同時に、つながりへの接続可能性の格差や資格性の曖昧さ等の不安定さ、「沈黙のマルチ帰属」的態度や「好き」の排他性・拘束性といった、「影」の性質を導く可能性があるということが明らかになった。この表裏の様相からは、趣味縁が、一方で人々に自由な参加と交流を促しながら、他方では「好き」に基づいて変動する、離脱と排除が紙一重なフィールドへの接続能力を求める縁であるということが推察されよう。

最後に、本稿で十分に検討することの出来なかった２つの論点を、今後の課題および展望として挙げておきたい。１点目は、血縁・地縁・社縁と趣味縁と

[18] 例えば、マルチ商法への勧誘や性的目的による参加が挙げられる。

を区別する大きな特徴のひとつである、「楽しい」という性質である。関係人口や副業解禁等、地縁や社縁にも新しい形態が現れる現代において、非拘束性やマルチ帰属性などの性質は、かつてのようには他と趣味縁とを分かつ大きな特徴たりえなくなっているのではないか。ゆえに、参加が本来的に「楽しい」ことに軸足を置いているということの効果にこそ、今後は検討する意義があると考えられる。それには例えば、趣味と趣味による人づきあいがどのように健康を維持・増進させる作用を発揮しているかといった、予防医学・社会疫学上の問いや知見がヒントとなるだろう[19]。

このような「光」の論点に伴って、2点目に、趣味縁と福祉との関係を追究することも重要な論点である。「趣味縁」の語をいち早く提唱した大内（1979）は、大衆文化や余暇、文化による結びつきの重要性を、一貫して、増幅する福祉施策への処方箋として論じている。すなわち、西欧諸国が見舞われている福祉財政への圧迫問題を避けるためには、「生活の質」の向上を個々人の力や地域社会の中で実現させる方が「効率もよいし、多様な生活の質を生み出していくことができる」というのである（大内 1979：19）。こうした余暇と政策の関係性については青野（2021）の研究に詳しい。青野は1970年以降の日本の余暇政策文書を分析することで、「余暇」が「自由時間」へと呼称が変化したのを皮切りに、その「活用」を人々に促すことによって、労働・雇用、社会保障・社会福祉をはじめとする様々な問題に対応させようとしてきた歴史を明らかにした。これをみると、趣味縁も例外とは感じられない。

こうした、大衆文化や趣味縁ないし自由時間の政策的「活用」という観点は、先の1点目の論点である趣味の「楽しさ」、「生きがい」、健康問題とも表裏一体であり、趣味縁の「光」と「影」を検討する上でのもうひとつの大きな論点になると言えよう。

本稿冒頭でも述べた通り、趣味縁に限らず、「共通の価値観でつながる縁」は

[19] 一例には、高齢者の健康とソーシャル・キャピタルに関する調査・研究において、趣味の会への参加率が高い自治体ほど平均うつ得点が低く、メンタルヘルスが良いとの報告があること（近藤 2013；近藤 2014 など）が挙げられる。

今後ますますその存在感と重要性を高めると考えられる。本稿で示した趣味縁の両義性は、旧来型の社会構造をも組み替えるこうした新しいネットワークを考える上で、何らかのヒントとなるだろう。

謝辞

＊本論文は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2109 の支援を受けたものです。

参考文献

青野桃子（2021）「政策的に「活用」される自由時間――シリアスレジャーのあやうさ」宮入恭平・杉山昂平編『「趣味に生きる」の文化論――シリアスレジャーから考える』ナカニシヤ出版：153-161.

赤枝尚樹（2011）「同類結合に対する都市効果の検討―エゴセントリック・ネットワークデータに対するマルチレベル分析の適用―」『理論と方法』26（2）：321-337

浅野智彦（2011）『趣味縁からはじまる社会参加』岩波書店

――――（2012）「趣味縁から公共性へ」小谷敏・土井隆義他編『若者の現在　文化』日本図書センター：245-274.

有馬知子（2021）「SNSでつながる「ネオ県人会」Uターンなど人生の選択のきっかけに」（山田泰久氏インタビュー）https://www.works-i.com/project/10career/mutual/detail001.html（2021 年 12 月 4 日）

池上英子（2005）『美と礼節の絆――日本における交際文化の政治的起源』NTT 出版

石田光規（2011）『孤立の社会学――無縁社会の処方箋』勁草書房

井上忠司（1987）「社縁の変容」栗田靖之編『現代日本文化における伝統と変容 3 日本人の人間関係』ドメス出版：244-259.

上野千鶴子（1987）「選べる縁・選べない縁」栗田靖之編、前掲書：226-243.

――――（1994）「選べる縁・選べない縁」井上忠司・祖田修・福井勝義編『文化の地平線――人類学からの挑戦』世界思想社：136-153.

――――（2008）『「女縁」を生きた女たち』岩波書店

大内浩（1979）「豊かな社会の運営」『精密機械』45（1）：15-22.

大戸朋子・伊藤泰信（2010）「同一嗜好の女子たちをめぐるメディア・表象・実践」

『九州人類学会報』37：69-87.
――――（2019）「二次創作コミュニティにおける「愛」をめぐる闘争と調停」『コンタクト・ゾーン』11：207-232.
――――（2020）「趣味のコミュニティにおけるつながりの作法――二次創作を行う腐女子の同人作家を事例として」『年報人類学研究』11：154-164.
岡澤康浩・團康晃（2017）「読者たちの「ディスタンクシオン」――小説を読むこととそれが趣味であることの差異をめぐって」北田暁大・解体研編著『社会にとって趣味とは何か』河出ブックス：131-158.
片岡栄美（2019）『趣味の社会学――文化・階層・ジェンダー』青弓社
――――（2020）「女子大生にみるアニメ・ゲーム系オタクとアイドル系オタクの象徴闘争」『ユリイカ』青土社、52（11）：296-304.
加藤康子（2016）「アートと趣味縁の拠点における「非クリエイティブクラス」のハーフシフトについて――札幌市の OYOYO ゼミの事例から」『文化経済学』13（1）：36-44.
――――（2017）「趣味縁研究の系譜と現代社会におけるその現れの一例――群馬県前橋市 「前橋○○部」の事例から」『文化経済学』14（2）：46-54.
国土交通省（2021）「ライフスタイルの多様化と関係人口に関する懇談会――関係人口と連携・協働する地域づくり　最終とりまとめ」https://www.mlit.go.jp/kokudoseisaku/content/001396629.pdf（2021 年 12 月 4 日）
近藤克則（2013）「公衆衛生における地域の力（ソーシャル・キャピタル）の醸成支援」『保健師ジャーナル』69（4）：252-259.
――――（2014）「ソーシャル・キャピタルと健康」稲葉陽二・大守隆・金光淳ほか著『ソーシャル・キャピタル――「きずな」の科学とは何か』ミネルヴァ書房：66-96.
菅谷美沙都（2020）「市民ランナーによる趣味コミュニティの記述的分析」『ランニング学研究』31（1）：90-92.
須川亜紀子（2021）『2.5 次元文化論――舞台・キャラクター・ファンダム』青弓社
杉山昂平（2021）「SNS が築く弱い趣味縁の面白さ」宮入恭平・杉山昂平編、前掲書：100-109.
髙木悠希（2021）「趣味縁と橋渡し型社会関係資本に関する一考察――趣味縁研究のレビューを中心に」『公共研究』17（1）：395-419.
谷村要（2019）「「アニメ聖地化」の過程におけるファンの地域活動への関与―静岡県

沼津市の事例から―」『地域活性研究』10：79-88.
辻泉（2015）「若者たちのパーソナル・ネットワークと「趣味縁」：2007YCRG 杉並調査の結果から」『人間関係学研究』17：145-162.
土屋正臣（2020）「経済活動を基礎とした俳諧ネットワークの政治運動化過程の一考察――　秩父地方の寺社に奉納された句額を手がかりとして」『城西現代政策研究』14（1）：21-38.
長崎励朗（2021）「インターネットは音楽から何を奪ったか？」松井広志・岡本健編著『ソーシャルメディア・スタディーズ』北樹出版：54-62.
中村天江（2021）「オンラインで県人会は「しがらみ」から「弱い紐帯」へ」リクルートワークス研究所、https://www.works-i.com/project/10career/style/detail002.html（2021 年 12 月 3 日）
藤田英典（1991）「学校化・情報化と人間形成空間の変容―分節型社縁社会からクロスオーバー型趣味縁社会へ―」『現代社会学研究』4：1-33.
守真弓（2021）「世界を揺るがす「BTS 革命」」朝日新聞 Globe、No,239、2.
渡部光（2016）「第 6 章　個人化社会における社会的ネットワーク形成の有効性――〈つながり〉をめぐる議論から」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』301：86-95
Fischer, Claude S.（1982）*To Dwell among Friends: Personal Networks in Town and City*. Chicago: The University of Chicago Press.（松本康・前田尚子訳（2002）『友人のあいだで暮らす――北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク』未来社）
Granovetter, Mark S.（1973）'The Strength of Weak Ties', *American Journal of Sociology*, 78：1360-1380.（マーク・S・グラノヴェター、大岡栄美訳（2006）「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編・監訳『リーディングス　ネットワーク論 家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房：123-154
Putnam, Robert D.（1993）*Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton: Princeton University Press.（河田潤一訳（2001）『哲学する民主主義――伝統と改革の市民的構造』NTT 出版）
――――（2000）*Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, New York: Simon & Schuster.（柴内康文訳（2006）『孤独なボウリング――米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房）

（たかぎ　ゆうき）

（2022 年 2 月 1 日受理）

Summary of an Article in English

“Light” and “Shadow” of Shumi-en——A study on the ambiguity of the connection based on the commonality of hobbies

TAKAGI, Yuhki

PhD. Student, Graduate School of Humanities and Studies on Public Affairs

A Shumi-en is a connection between people based on the commonality of their hobbies or interests. Shumi-en has gradually gained prominence in Japan with social individualisation and the increasing importance of cultural identity. However, most of the research to date has focused on the positive effects of Shumi-en, and there has lacked examination of the negative aspects and study comparing the bright and dark sides. Therefore, this paper analyses both the positive and negative aspects of Shumi-en, relying on previous research. As a result, it became clear that there is ambiguity in the various properties of Shumi-en that are expected to have some effect. Previous research has mainly focused on the positive aspects of Shumi-en. For example, there are such that it allows people to freely choose whether to enter or leave, that it is non-binding and open-ended ties, and that they are ties that will enable multiple belongings and bridging social capital. On the other hand, examining the negative aspects, I found that there were the following properties; a possibility of disparity in the acquisition of connections, uncertainty such as ambiguity of qualifications, concerns about members hiding their heterogeneity from each other, and the exclusivity and binding stem from the feeling of “liking” that is the trigger for Shumi-en. In other words, the light properties of Shumi-en can be the shadow

properties simultaneously, as free-choice requires interpersonal skills. Human relationships based on shared values and sympathy will continue to expand and grow in importance in today's Japanese society. The ambiguity of Shumi-en will provide some suggestions for such a way of connecting, which will grow in the future.